

グジャラート州カティアワール地方の港市と 中世イスラーム建築

深見 奈緒子

はじめに

西インドに位置するグジャラート地方は、インド亜大陸とムスリムとの関係を考える上で重要な地域である。12世紀末のデリーにムスリム政権が成立する以前から、交易を通してイスラーム教が伝わったことを示す遺構が残ることを、シュコーヒーは報告する [Shokoohy]。それらは、グジャラート地方最西部のカッチ地方の港市バドレシュワルにある、1159年のイブラヒム祠堂をはじめとするいくつかの実例である。一方、カッチ地方の南東部に広がるカティアワール半島では、シュコーヒーは先の著作に1286年の半島中央部のジュナガードのモスクを報告する。また、19世紀末から20世紀初頭にバージェスやカズンスによっていくつかの遺構が報告された。それらは14世紀後半というグジャラート地方のモスク建築においては比較的早い時代に位置づけられる。

グジャラート地方のイスラーム建築史を論ずる場合、従来は14世紀にデリー政権が進出したことに続くバローチ、キャンベイ、ドルカの大モスク、そしてアンヒルワダ・パタンおよびアフマダーバードを首都としたアフマド・シャー朝の諸建築、すなわちムスリム支配とその建設活動が注目されてきた [Brown: 48-61; Asher: 89-96]。近年、新たな研究を加味し、上述したようなデリー政権進出以前の遺構に言及しながら位置づけを行う研究もある [Merklinger: 68-71]。しかしながら、上述したカティアワール半島の14世紀の港市に存在する遺構を含めて検討した研究はわずかである。

カティアワール地方の港市に関しては、グジャラートの歴史を語る上での言及も少ない [Commisariat: 65-72]。ただし、これらの港市に所在したアラビア語あるいはペルシア語のインスクリプションは多数におよび、19世紀以来かなりの研究蓄積がある。これら諸点を合わせれば、カティアワール半島の港市のムスリムと関連する遺構は、グジャラートの歴史を考える上で重要であるにも関わらず、看過されてきたといえよう。

筆者らは、2010年9月にカティアワール半島のマングロール、ソムナート・パタン、ヴェラヴァルの3つの港市に残るイスラームの遺構に関して現地調査を行った (図1)¹⁾。す

1) 調査は、基盤研究B「インド洋海域世界における港市の形成と変容に関する調査研究」(代表：山根周)の助成によって行った。調査には、岡村知明(東京文化財研究所客員研究員)と西村弘代(東京大学大学院博士課程)が同行した。なお、本著に記載した図面は、調査時に共同で実測

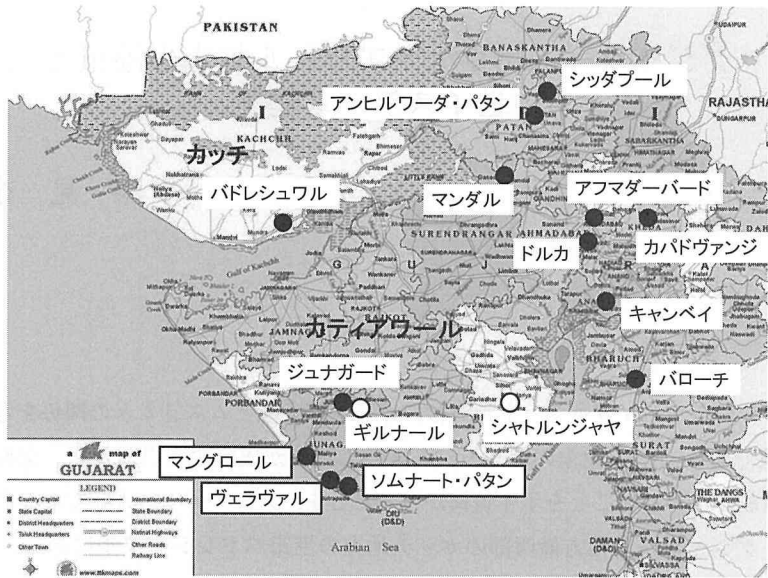


図1 カティアワール地方の港市 (ttk. maps に地名を記載)

でにインスクリプションと照合し14世紀後半の建立が判明している建造物、あるいはそれらと様式的に類似するものとして発表された建造物ばかりではなく、未発表の建造物の中に様式的に似通ったものを確認することができた。

本稿の目的は、第一にカティアワール半島の3つの港市に残る14世紀を中心としたイスラーム建築を報告することである。さらに、それぞれの建造物を、インスクリプション研究の成果を加味しながら、様式的な歴史情報とその立地する位置情報からの考察を通し、従来語られることの少なかった中世の港市と、そこでのムスリムの建設活動の様相を明らかにすることである。

I カティアワール地方イスラーム建築史の既往研究

カティアワール地方のイスラーム建造物を詳述した既往研究を一覧する。最初に建築的研究を行ったバージェスは、カッチ地方のバドレシュワールの2つのモスクとイブラヒム祠堂に関しては言及しているものの [Burgess 1876: 205-9]、カティアワール地方では、19世紀末の当時、ジュナガードに建造された王室の墓廟のみを取り上げる [Burgess: 176-8]。

カズンスは、マングロール [Cousens: 64-67]、ヴェラヴァール [Cousens: 34-35]、ソムナート・パタン [Cousens: 11-33] のモスクや墓建築を取り上げて歴史および建築的特色を

調査を行い、岡村が書きおこした。なお、本稿に掲載した写真は、調査を通して撮影したものである。

論述する。

コミサリアトは、ムスリム支配以後1297年から1818年に至る長大なグジャラートの歴史を、主たる歴史的建造物とインスクリプションを交えながら語る。しかし、主眼はインスクリプションの語る当時の支配者にある。カティアワール半島の事例としては、マンガロールの4つの建物の手短な解説にとどまる [Commissariat: 71-77]。

東京都立大学石井研究室の行った一連の研究では、グジャラートのイスラーム建築、特にムガル朝成立以前のアフマド・シャー朝様式の形成過程に焦点を当てる。マンガロールの大モスクを取り上げ、キャンベイのモスクの後継者として、アフマド・シャー朝様式に連なるアーチ壁モスクの一例と位置付ける [石井ほか1990c: 1121]。しかし、カティアワール半島のそのほかの遺構に関しては言及していない。

カティアワール半島の遺構を扱った数少ない研究にパテルによる著作がある [Patel]。主題はグジャラート地方のイスラーム建築におけるヒンドゥー工人との関連性にあり、様式の位置づけや変容に関しても議論する。けれども、12世紀から14世紀の遺構を年代順に検討し、ヒンドゥー建築史におけるマル・グジャラ様式に位置付けることを主眼とするため、カティアワール半島の諸例の地域性に関する言及はない。マンガロールの大モスクとラヒマット・モスクおよびソムナート・パタンの大モスクを取りあげる。

一方、インスクリプションに関しては、バージェスが1885年の著作に、マンガロール [Burgess 1885: 179] とソムナート・パタン [Burgess 1885: 182-5] のインスクリプションを紹介する。アラビア語とペルシア語のインスクリプションに関する研究は、1881年に出版されたコープス・インスクリプションム・バヴナガリ (以下 CIB と略)²⁾に集成されるが、そのほとんどは20世紀に再読され、大半が改訂される。1999年にはそれまでの研究についてデサイがリスト化を行った [Desai 1999]。本稿において注目する3つの都市に関してそれら全体を集計し、本来の所在地別に数えると³⁾、マンガロールに18件、ソムナート・パタンに20件、ヴェラヴァルに5件となる。デリー政権下 (~1408年⁴⁾)、アフマド・シャー朝 (1408~1583年)、ムガル朝 (1583年~) に分類し、さらに内容に関してモスク建設、それ以外の建設⁵⁾、その他⁶⁾に分けて表にした (表1)⁷⁾。総数43件中、デリー政権下、およびアフマド・シャー朝時代のものが33件、中でもモスクおよび諸建築建設の例が28件と多数を占めている。

2) 年代や読み下しに関しては、後に修正されている例が多い。ただし、インスクリプションの保存された場所に関しては、19世紀後半の様相を提示するため、都市の復元にとっては有用である。

3) 本来の場所から移されているものも多く、特にソムナート・パタンのものは、現在多くがジュナガードの博物館に保存されている。

4) アフマド・シャー朝設立者ザファール・ハーンのデリー政権からの独立年代に関してはデサイを参照 [Desai 1962: 32]。

5) 墓、市壁、城塞、キャラヴァンサライ、村などの建設がある。

6) 税金、禁止令、征服などの例がある。

7) 年代の読み下しに関して相違がある場合は最新のものを採用した。

表1 3都市のムスリム関連のインスクリプション数

	マングロール				ソムナート・パタン				ヴェラヴァル			
	モスク建設	その他建設	その他	計	モスク建設	その他建設	その他	計	モスク建設	その他建設	その他	計
～1408	4	3	1	8	3	3	0	6	1	1	0	2
1408～1583	1	1	2	4	9	0	2	11	2	0	0	2
1583～	0	4	2	6	0	2	1	3	0	1	0	1
計	5	8	5	18	12	5	3	20	3	2	0	5

II 3つの港市 —— マングロール, ソムナート・パタン, ヴェラヴァル ——

1 マングロール —— 既存報告にある4遺構と新発表の3遺構 ——

マングロールは古くはマンガラブラ⁸⁾と呼ばれる歴史的な港市であった。港から約2キロメートル北東に位置する旧市街は、東西約420メートル、南北約450メートルの歪んだ矩形の市街地で、北側中央に城塞(ダルバルガド)が位置し、東西を貫く大通りと、城塞から南に伸びる通りが町の骨格をなす(図2)。現地において、現在の周遊道路の少し内側に、歪んだ矩形の市壁の痕跡を辿ることができた。現存を確認できるのは南門と北門であるが⁹⁾,

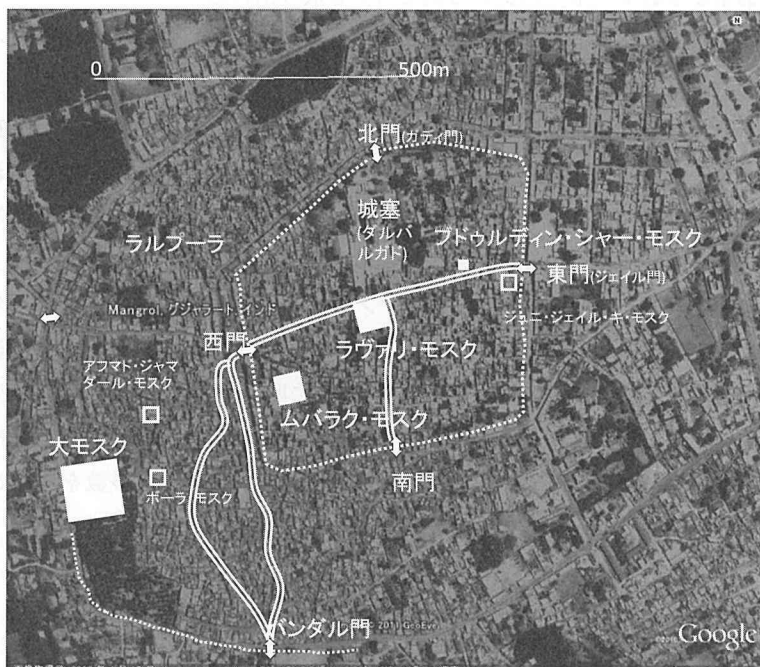


図2 マングロール (Google Earth に加筆, image©2010 DigitalGlobe)

8) GBはマンガルプル・パタンとし、プトレマイオスのモノグロッサムであるとし [GB: 542], コミサリアトはその説を踏襲する [Commissariat: 71]。

9) 北門はダルバルガドの門で、ムガル朝期以後の建築と推察される。

市壁には東西南北に門が設けられたという¹⁰⁾。この市壁を取り巻くように、外側の市壁が存在したことを、大モスクの南側に残る市壁の痕跡が語る。外側市壁と港へと続く道との交点はバンダル（港）門と呼ばれる。外側市壁と想定される個所は、現在リングロードとなっているが、当初から内周市壁を囲んでいたかは不明である。内周市壁西門からバンダル門へと続く市域においては、2筋の南北に走る弓型の道路がその骨格をなす。

既応研究による遺構に、内周市壁の西外側、外側市壁の内側に面して位置する大モスクがある¹¹⁾（図3）。建立者と建設年代に関して、ボンベイ・ガ

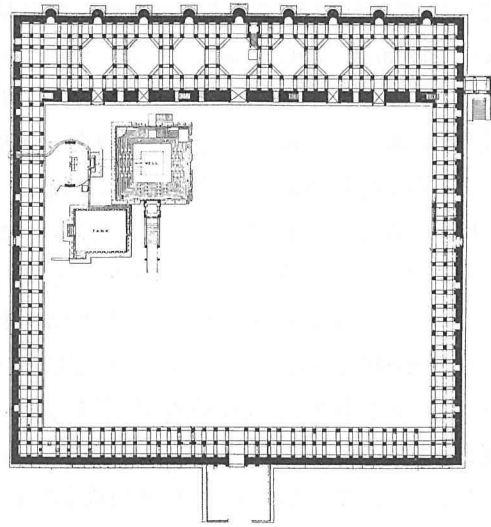


図3 マングロール大モスク平面図（Cousens 1931 : Pl. LXXVIに加筆）

ゼッティア（以下GBと略）はデリーのフィールーズ・シャー・トゥグルク（1351～88年在位）治下のイズアッディン・ビン・アラム・シャーによる1373年を〔GB:543〕、バージェス〔Burgess 1885:182〕とカズンスは同治下1364年にワジール、サマス・ハーンによる1364年を、コミサリアトとパテルはイズアッディン・イブン・アラム・シャーによる1383/4年を採用する¹²⁾。ファサードの特徴的なアーチ壁¹³⁾に関して、カズンスは「ファサードやドームという追加的な新たな造作が、転用材と溶け合いアフマダーバードの様式に比べれば装飾が控え目な様式を見せる〔Cousens:64〕」と述べる。コミサリアトは「2階建

10) CIBには4つの門の呼称が見られる。ガディ門は、ガディが玉座を意味することから、ダルバルガド（城塞）の北に位置する門、バンダル門は今もその名をもつ外側の市街の南門である。ジェイル門は東門の内側に19世紀に監獄が設けられていたことから東門とも考えられるが別に東門の記載があるので、南門あるいは西門の可能性もある。

11) マングロールの大モスクとラヴァリ・モスクに関しては、インド考古学局指定物件との理由から調査時に内部写真を撮影することができなかった。写真撮影許可をとって、写真撮影することは今後の課題である。

12) パテルが根拠とする1383/4（785）年を記載するインスクリプションは、CIBによると、ポーラ・モスクの壁にはめ込まれているとある。ただし、デサイは、大モスクのミンバルの右にあると記し、失われないように大モスクから近くのパーラ・モスクに移されたという説があるものの、不明であると記す〔Desai 1962:31〕。

13) アーチ壁は、インド土着の梁柱構法の礼拝室の目隠しとして、デリーのクトゥップ・モスク（1198年）、アジメールの大モスク（1206年）で導入され、トゥグルク朝のグジャラート侵攻とともに、キャンベイの大モスク（1326年）、ドルカのヒラール・ハーン・ガーズイー・モスク（1333年）でも構築された〔石井ほか1986:889〕。

での周廊は転用材ででき、……その中にはデーヴァナガリ文字の言葉が刻まれる [Commissariat: 72]』と説く。一方パテルは、「9つのベイを並べる礼拝室の規模はバローチやキャンベイを凌ぐ。12世紀中葉にさかのぼる天井をはじめ転用材を用い、中庭には階段井戸がある [Patel: 141]』と土着技術との関連を説く一方で、デリーのベガンプーリー・モスクの写真を掲載しトゥグルク朝の実例とよく似ているとする [Patel: 16]。

現地調査によれば、明らかに転用材を用いたモスクながら、部分的には新材が使われる。12柱式¹⁴⁾のドームを9つ並列させるという例は、アフマド・シャー朝建築と比較しても間口に関しては飛びぬけて大きい [石井ほか 1990a: 1118]。アーチ壁自体の形は、グジャラート地方現存最古のアーチ壁をもつ 1325 年のキャンベイの実例と比べると、アーチ開口部のスパンが小さく、梁柱構法の出窓を分節するなど相違する。また、中庭を囲う回廊が2重2層である点は、グジャラートに例を見ない¹⁵⁾。インスクリプションとの関係づけは不明ながら、様式的観点からも 14 世紀後半の建設であるといえよう (図 4)。

第2のラヒマット・モスクは、市街地の北東約3キロメートルの郊外に位置する (図 37)。カーディー・ジャラルがブハーリー教団のシェイフを記念し 1382/3 (784) 年に建立したことを語る黄色大理石の特徴的なインスクリプションがミフラーブの上部にはめ込まれる [Desai 1962: 23-4]。カズンスは「部分的には古い寺院からの転用材が用いられるが、ファサードの部分はイスラーム教徒の仕事で、ファサードの両端のアーチは、特にデザインが優れる [Cousens: 65]』と述べる。一方、パテルは、内部には新材を用いるのに門には転用材を用い [Patel: 133]、礼拝室のファサードは、縮小はされているがキャンベイやドルカあるいはマングロールの大モスクと同様にイランやアフガニスタン由来のアーチ壁であると説く¹⁶⁾ [Patel: 136-7]。

この建造物の特殊点は、ファサードの構成に加え、北側に付設する3つの小室にある (図 5)。その理由として、郊外に位置する神秘主義教団宗教施設としての特殊性が考えられ、ジュナガードのアル・イラージー・

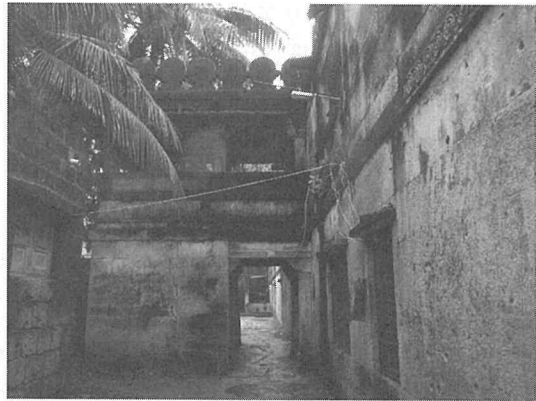


図4 マングロール大モスク、北入口を西から撮影

14) 12柱式とは、正方形の一辺を3スパンに分割し、正方形の周囲に計12本の柱を立て、正方形の中に造られる内接八角形にドームを持ち送りの載せたものをさす。[石井ほか 1984a: 2853]

15) ガンジス川流域のジャウンプルに1373年に建立されたアタラ・モスクでは、回廊を2層とする。

16) この見解に関しては、同様なアーチ壁はどこにも見当たらず、ラヒマット・モスク独自の造形であると考えられる。

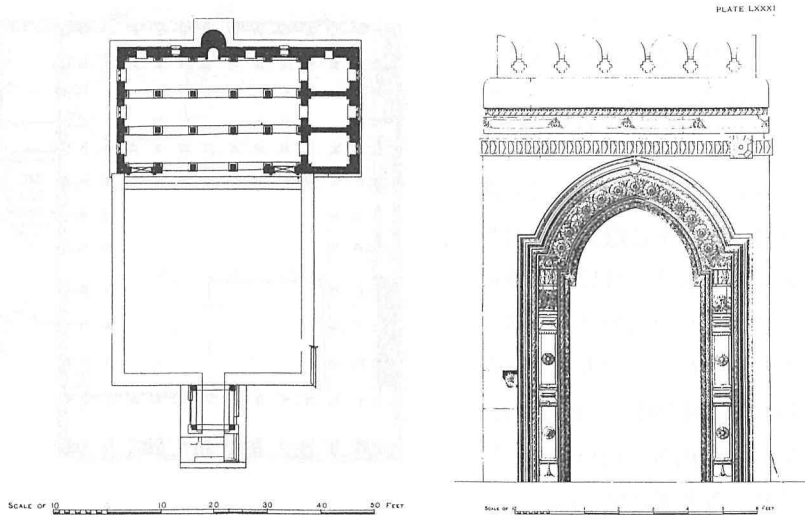


図5 ラヒマツト・モスク平面図とアーチの図 (Cousens 1931: Pl. LXXXI に加筆)

モスク (1286 年) との共通性が指摘できる。また平面はグリッド式¹⁷⁾とするが、梁を間口方向だけに渡し、天井に厚い矩形の板石を並べる点は、バドレシュワルの 12 世紀後半と推定される 2 つのモスクと共通する (図 6)。

第 3 のラヴァリ・モスクは、東西の大通り中央部の南側、南門へ下る道の西側という内周市壁の中心に位置する (図 2)。GB は 1379 (780) 年のインスクリプションの所在を語る

が [GB: 544], 以後の研究に引用されない。カズンスは中庭が列柱で囲まれている点と、北側にあるドームの架かった大きな入口を指摘し、ムハンマド・トゥグルク治下の 1401 年にジャーファル・ハーンによって建設されたとする [Cousens: 65-6]。コミサリアトはラヴァルの寺院がムスリムの信仰の場へと転換されたことからこの名をとると指摘し、ラヴァリ・モスクの近傍のダルガーに所在する 1386 (788) 年のモスク建設のインスクリプション [Desai 1962: 30-31] が建設年代を語ると断定する [Commissariat: 74]。パテルはこの建造

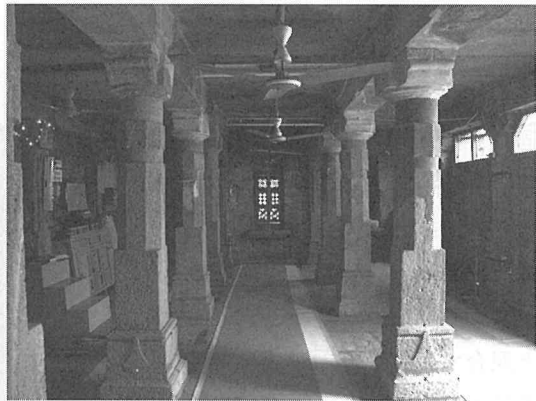


図6 ラヒマツト・モスク内部、礼拝室内を南から撮影

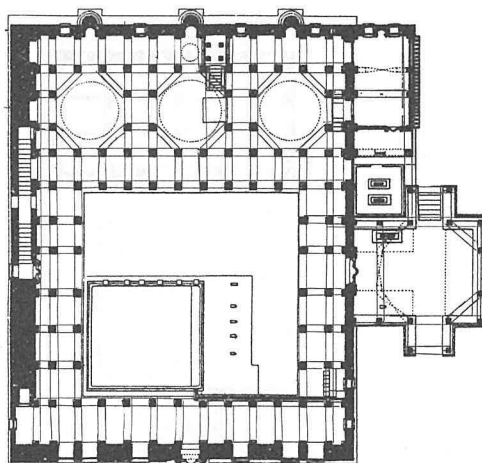
17) 碁盤の目状 (グリッド) に柱を立てる方式をさす。この場合礼拝室の規模は、間口方向のスパンと、奥行方向のスパンで表される [石井ほか 1984: 2853]。

物に関しては特に言及しておらず、ラヴァリ・モスク建設を示すインスクリプションも指摘されていない。

12柱式のユニットを3つ並べて礼拝室とする(図7)。小規模であるにも関わらず、中庭の周囲を2段重ねの列柱で囲む点が特異である。特に北と南の周廊はマングロールの大モスクや後述するソムナート・パタンの大モスクと同様に、2重の柱列を持つ。12柱式ユニットを用いた北門は、転用材で、柱を2段に重ね、西と東に突出部を設ける(図8)。また、北門以外は大方、新しい石材を用いる点は、ラヒマット・モスクと同様で、ミフラーブやミンバルの分節からも、マングロールの大モスクおよびラヒマット・モスクと同じ14世紀後半の建造物であると推察できる。また、町の中心という位置から、1395年の城塞建設[Desai 1962: 35-6]、1400年の市壁建設のインスクリプション[Desai 1962: 39]と照合すると、イスラーム教徒による町の整備の一環であったと解釈できる。

第4は、市街地の南西、港の近く、ハズラット・サイイド・シカンダル

のダルガー西側に位置する2ドーム廃墟である(図37)。カズンスは平面図を示し、転用材で造られた2つの彫刻天井を連ね、いくつかの柱は後補の可能性があり、モスクと断定する[Cousens: 66]¹⁸⁾。一方、コミサリアトは、この祠堂はのちにマングロールの町の聖人となったハズラット・サイイド・シカンダルと関係する建物で、彼はパンジャブ地方のウチに葬られたマフドゥム・ジャハニアンマフドゥム・ジャハニアンの弟子で、1375年のマングロールでのムスリム支配



Scale of 0 10 20 30 40 Feet

図7 ラヴァリ・モスク平面図(Cousens1931: Pl. LXXXIVに加筆)



図8 ラヴァリ・モスク、北入口を北から撮影

18) 現在は2つのドームの下に墓石が置かれる。カズンスはこのモスク近傍にムーア風のアーチのあるモスクの事を記しているが、現在ダルガーの内部にある。ムガル朝の様式と判断したので、本稿では取り上げない。

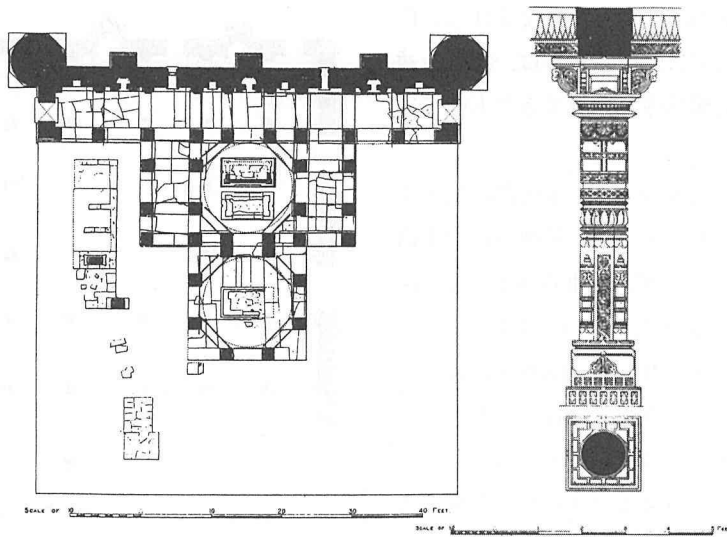


図9 2ドーム廃墟平面図 (Cousens1931: Pl. LXXXIVに加筆)

の確立の際に同行した人物であると説く [Commissariat: 76-7]。

この建造物で注目すべきは、12柱式のドームと、8柱式ドームがキブラ壁に向かって前後に並ぶ点で、類例は知られていない (図9)。持ち送り式の2つのドームは手の込んだ彫刻があり、寺院からの転用材かもしれない。しかし、丁寧な柱の彫刻は、具象的なモチーフは伴わず、削り取られた跡もなく、転用材ではなく新材であると推察される (図10)。柱

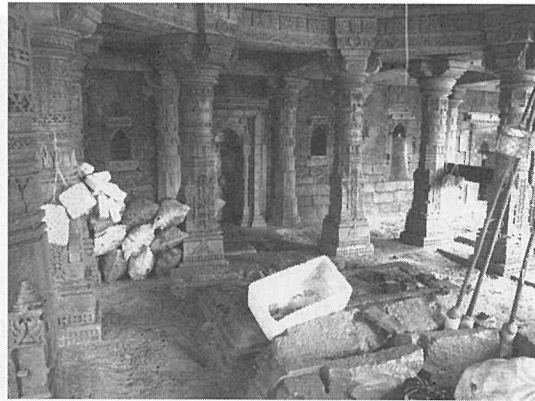


図10 2ドーム廃墟、12柱ドームの南東隅からキブラ壁を撮影

の彫刻から、おそらく西壁と12柱式の部分が最初に構築され、8柱式の部分が少し時代をおいて、付設されたようだ。両端に円形断面のボルジュを持つ西壁に、3つのミフラープがある。大モスクおよびラヴァリ・モスクでは、上部をトーラナ型とし、外側に円形断面の突出部を有する類似したミフラープの様式が採用される¹⁹⁾のに比し、ここでは矩形の枠内にアーチを収め、外側に矩形断面を突出させる点は異なり、建設年代が前3者よりも多少下る可能性がある。

19) ラヒマット・モスクでは、本来トーラナ型となる部分にインスクリプション板がはめ込まれているが、他の点はこの様式に当てはまる。トーラナ型に関しては図14、35参照。

以上、4件は既往研究に言及された物件であるが、以下に述べる3件は、調査を通して、様式的類似性が確認できたものである。

まず、内周市壁の内側、南西部に位置するムバラク・モスクには、礼拝室の北壁面にインスクリプションが埋め込まれる(図2)。既に報告された1385/6(787)年のモスク建設を記すものだが、1889年にはジェイル門近くのモスクに[CIB:12-3]、デサイはジュニ・ジェイル・キ・マスジド(旧監獄モスク)の中央ミフラブの左側に所在すると述べる[Desai 1962:27]。ジェイル門が西門とすれば、当モスクとも考えられるが、ミフラブの上にはめ込まれてはいない。また、ジュニ・ジェイル・キ・マスジド²⁰⁾という名のモスクは、東門の内側、東西通りの南に接して存在するので、何らかの事情でインスクリプションが付け替えられた。

平面は、12柱式のドームを中心とし、後述する1332年建設のヴェラヴァルの大モスクの平面とほぼ同様である(図11, 12)。ただし、モスクのファサード中央に一ペイを突出する点は、グジャラート地方の礼拝室

に類例はない。とはいえ、ラヴァリ・モスクの北門には、東西に突出部があり、ヒンドゥー寺院の礼堂(マンガバ)では伝統的な形式である。またこの部分には墓が安置され、2ドーム廃墟で8柱式ドームが付加された点とも似ている。西壁には3つのミフラブがあり、上部に先述したトーラナ型の飾りを冠し(図35)、外壁に水平帯を分節した半円筒状の突出を見せる点も、マングロールの大モスク、ラヴァリ・モスクと共通する。柱やドームは新材な

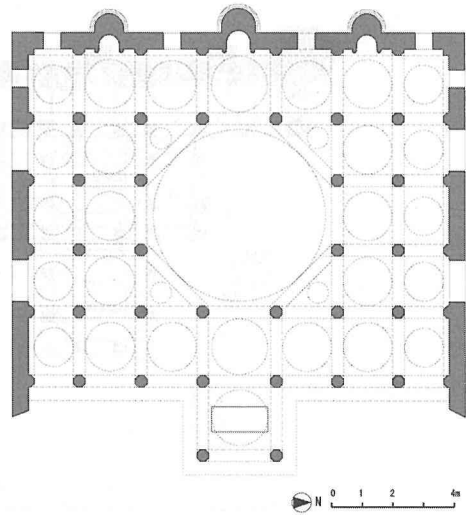


図11 ムバラク・モスク平面図、アーチ部分は後世の補強

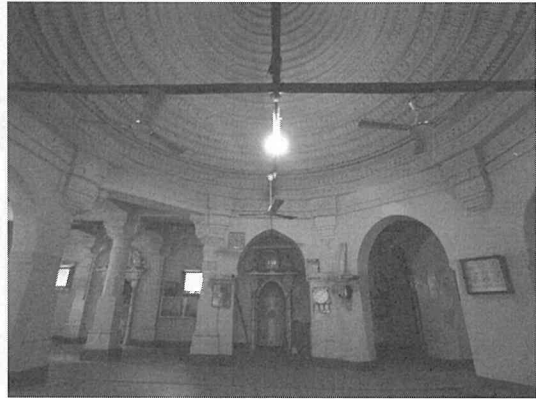


図12 ムバラク・モスク、中央12柱ドーム、柱間のアーチは後世の補強

20) 東門の内側に、19世紀後半にジェイル(監獄)がおかれたこと因んだ名称である。デサイはこのモスクに関して、古いけれど小規模でたいしたことのない建築で、アマル・ヴィラスという個人の所有物になっていると述べる。

がらラヒマット・モスクと共通する伝統的な様式で、南門には大モスクおよびラヒマット・モスクのファサードのアーチと類似した特徴的なアーチが刻まれる（図 34）。加えて、北門と南門の彫刻天井、軒飾りなどに 14 世紀後半の建築との共通性が指摘でき、少なくともムガル朝以前の建築であろう。インスクリプションとの関連は不明なもの、様式的観点から 1385/6 年とすることも可能な様相を呈する。

2 番目は、ブドウルディン・シャーと呼ばれるモスクで、内周市壁の内側の東部分、東西の主要通り北に位置する（図 2）。平面は間口 3 間奥行 3 間で、西壁中央にミフラーブを持つ（図 13）。ミフラーブ上部はトーラナ型ながら、内部外部ともに矩形断面とする（図 14）。トーラナの下部には、生命の樹のモチーフ²¹⁾が挿入される。床面は現在の地平面よりかなり低く、建物は半分地中に埋もれ、北壁には、ラヒマット・モスクとよく似たジャリ（石製透かし細工の窓）が挿入される。ファサードの 4 本の柱は彫刻を施し

た転用材で、内部の柱は分節がない四角柱で、柱頭は他に例を見ない波状の文様が施され、内部の柱は新材であると推察される。梁は間口奥行両方向に渡される。建物の南側、主要通りとの間には墓石が並び、ダルガーとなる。

先述したラヴァリ・モスク近くのダルガーにあったとされるインスクリプションに関して、CIB は 1386 (788) 年 [CIB: 13-4]、デサイはフィールーズ・シャー・トゥグルクの治世のモスクの建設を語る。デサイは、インスクリプションが所在したモスクについて、「梁柱構法で建てられ、開放的な列柱ファサードで、けばけばしい大きな入口をもつ [Desai 1962: 30]」と記す。現在入口部分は扉のみになっているが、このモスクである可能は否めない。また、ダルバルガドに保存されたインスクリプションには、1424/5 (828) 年のモスク建設

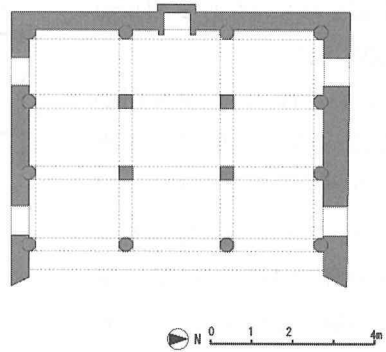


図 13 ブドウルディン・シャー・モスク
平面図



図 14 ブドウルディン・シャー・モスク、西壁のミフラーブ

21) キャンベイの大モスクのミフラーブの左右、マングロールの大モスクのミフラーブおよびミンバルに、同様なモチーフが見られる。

を記したのものもある [Desai 1953: 54]。

3番目は、バンドル門から港への道に位置するカトゥヴィ・イードガー・アンド・ダルガーと呼ばれる複合体である(図37)。聖者の墓とされる八角形墓廟の西側にイードガーの壁があり、墓の南側に2階建ての建造物がある(図15)。

墓建築は、四角形の基壇上に白大理石の8本の柱を立て、持ち送りドームを載せる(図16)。白大理石はラジャスタン産で、ミフラーブなど重要な箇所だけに使われる材料だ。柱の彫刻は控えめながら分節され、西側の2本の形状が異なる点から、未完成の段階の柱が転用され、ドームは、砂岩を用い彫刻はほとんどなく、新材で構築されたと推察される。

墓の西側に位置するイードガーの壁面には彫刻されたミフラーブがはめ込まれ、矩形の枠組みの中にアーチが彫り込まれる。上部にはトーラナ型の彫り物があり、トーラナ中央下部にアーチを挿入する。ただし、ミフラーブの外壁面への突出はない。

墓の南に位置する2階建ての矩形の建造物は間口3間奥行2間で、間口方向に梁を渡し、1階の天井は切り石造である(図17)。柱や梁は新材で、ラヒマット・モスクと同様に分節される。東側のファサードは軒を持ち、本来は中央入口と両側には腰壁の上に開口部が

設けられていたことが推察される。外階段で上がる2階は木造天井を載せる。

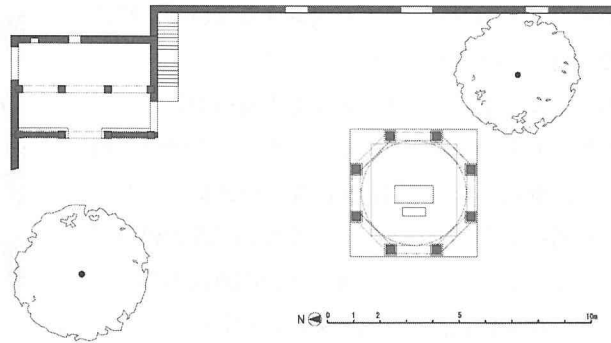


図15 カトゥヴィ・イードガー・アンド・ダルガー平面図



図16 カトゥヴィ・イードガー・アンド・ダルガー、墓建築を南から撮影

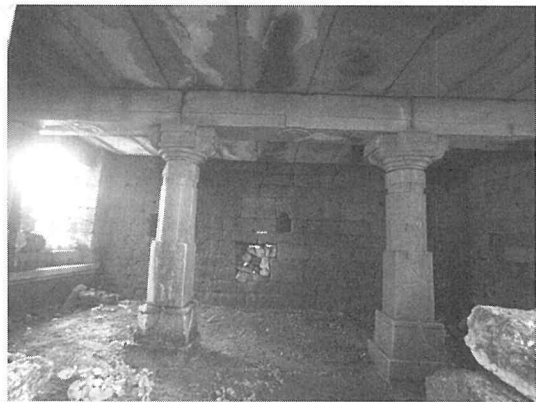


図17 カトゥヴィ・イードガー・アンド・ダルガー、2階建て建造物内部を東から撮影

様式的観点から見ると、墓建築とイードガーの壁、および矩形の建造物の1階は、15世紀の建造物と考えられる。

墓建設に関するインスクリプションとして、1389(791)年が報告される。CIBは町の東郊外のアフマド・ジャマダール・モスク²²⁾に[CIB:15-6]、デサイはアフマド・マシャイフ・モスクに所在することを語る[Desai 1954-5:153]。また、16世紀に属するものとして、港への途中のバヴァン・サブリ・モスクに墓建設を伝えるものが報告される[Desai 1954-5:157]。

調査によって判明したこれら3件について、様式的観点から見て、14世紀後半から15世紀と判断できる側面と、特異な面が共存し、必ずしも引用したインスクリプションとの関係性が確信できるものではない。しかしながら、ムガル朝以後の建造物とするには難しく、建設年代をムガル朝以前とすることが適当であろう²³⁾。

2 ソムナート・パタン —— 既存報告にある3遺構と新発表の4遺構 ——

グジャラート地方の内陸部に位置するアフマド・シャー朝が最初に都を置いたアンヒルワダ・パタンと区別して、ソムナート・パタンあるいはブラバス・パタンとも呼ばれる。海岸沿いにあるソムナート寺院は、歴史上名高く、何度もイスラーム勢力の侵攻を受け、再建が行われた[深見 2008:33]。北西から南東にむかう海岸線沿いに、南北、東西ともに約600メートル余りに町が広がる(図18)。11世紀にさかのぼる北門から海岸線沿いに隣町ヴェラヴァルまでの街道が続く(図39)。北門の内側に城塞が位置し、北門から海岸沿いのソムナート寺院までほぼ南北の大通りはバザールとなる。城門から東西へと連なる北市壁は確認できるが、他の市門や市壁は確認できなかった。カズンスは、東門と西門に関しても言及し[Cousens:11]、東門は大モスクの北側を走る街路上に位置していたことが推察される²⁴⁾。市壁の南側はソムナート寺院の境内までである。

まず、町のほぼ中心に建つ大モスクについて(図19)、カズンスは、ムザッファル・シャー(1391-1411年)、あるいはアフマド・シャー(1411-42年)の命による建築とする[Cousens:28]。転用材を用いたモスクで、12柱式ユニットの接合方法²⁵⁾、ミフラーブの外側突起部分が他のグジャラート地方に例を見ない点²⁶⁾、12柱式2層構成の入口を列柱廊と

22) アフマド・ジャマダール・モスクは、2010年の現地調査においては、大モスクの北東に位置しており、町の西側にあたる。

23) 様式的詳細な検討は、稿を改めて述べたい。第18回ヘレニズム～イスラーム研究会、2011年7月3日発表「グジャラート地方の港市における中世のモスク建築——様式史的検討」

24) この道をまっすぐ東に進むと、川沿いのスーリヤ寺院へと達する。

25) 12柱式を並列する場合、クトゥブやアジメール、キャンベイでは12柱式ユニットが間にグリッドを挟まずに接合される。この大モスクも同様である(図19)。しかし、15世紀にはマングロールの大モスクに見るような配列に収斂していく(図3)。

26) 現在は博物館となり、ミフラーブはかなりの改変を施され、当初の様相は不明である。しかし、外壁面に矩形断面に突起し、壁上に立ちあがる部分はモスク当初のものであろう。また、博物館



図18 ソムナート・パタン (Google Earth に加筆, image© 2009 DigitalGlobe)

結びつけるように用いる点²⁷⁾, 南北辺に入口を設ける点²⁸⁾など, 14世紀後半のマンガロールの諸実例よりも, 建設年代がさかのぼる可能性がある(図20)。なお周廊の柱列が2重である点はマンガロールの大モスクとラヴァリ・モスクに共通する。おそらくカズンスが説くように, スーリヤ寺院の敷地を使用し, 入口部分および周壁はそのままの形で再利用し, ラヴァリ・モスク同様, 町のほぼ中央部の交差点に位置することから, ムスリムの支配確立との関連性が考えられる。

ムスリムに関する最も古いインスクリプションは町の北東部にあるカーディー・モスクに保存されたもので²⁹⁾, 1264 (662)年のモスク建設を語る [Desai 1961: 10-5]³⁰⁾。ジュナガードの1286年のモスクよりも古く, 1159年のバドレシュワルに次ぐものである。カズンスは後述するマーイプリがこのモスクだと推察する [Cousens: 31-2]。インスクリプション

²⁴⁾ に改装される前のカズンスの平面図には内外ともに矩形断面を呈している。

27) バローチ, キャンベイ, ドルカ, ラヴァリ・モスクでは, 12柱式ユニットを門とする。ただし, 当ソムナート・パタンの大モスクでは柱廊に組み込む形をとり, 特異である。

28) クトゥブ・モスク, アジメールと共通する。

29) カーディー・モスクは現代建築で, 2010年の現地調査ではインスクリプションを確認することはできなかった。

30) これに関しては, 後述するヴェラヴァルにサンスクリット語の同じ内容を示すものが存在し, パテルはヒンドゥー教徒とムスリムの共生の状況を説く [Patel: 73-76]。

は、ホルムズ出身の大商人の船主が町の外のマハジャンパリ（商人の区画）に土地を購入し、モスクを建立したことを伝えるので [Thapar: 87]、町の中央の大規模モスクの建立とは合致しない。年代的に次に位置するのが1326年のインスクリプションで、トゥグルク朝支配下、マリク・タージ・ウッディン・ドゥワル・アフマド治下のハミード・イブン・アフマドによるモスク建立を語る [Desai 1955-56: 89-90]。建築様式的には、大モスク建立についてこの年代を採用することも可能で、しかも3キロメートル北西に位置する隣町のヴェラヴァールの大モスクの建立が1332年であることから、ソムナート・パタンの大モスクも14世紀前半に建立されたと考えることが妥当と思われる。

第2に、町の北西郊外、海岸沿いのヴェラヴァールへの途上に位置するマーイプリがある（図39）。カズンスは、12柱式ユニットに載る彫刻天井ドームの素晴らしさから、11世紀から12世紀にさかのぼるソムナート寺院の一部が移築され、先述した1264年のモスクとして建設されたのだろうと説く [Cousens: 31-2]（図21）。現在はダルガーとなり、全体がコンクリートで厚塗りされるが、ドームの内側だけはペンキが塗られ

たのみで、当時の彫刻天井の状況を確認できる（図22）。12柱式ユニットに周廊を回し、西側をキブラ壁にしたものである。カズンスの掲載する中心部の図面は柱配置が不整形で、同立面写真は、西を除く3面は新材を用いた列柱である。キブラ壁以外を開放した礼拝室はないので、マンゴロールの港近くの2ドーム廃墟と同様に、この建築も本来墓建築として建設されただろう。中心の12柱部分が一段高く、周囲の下屋の部分が一段低いことから、墓建築の可能性が高い。西面に設けられたミフラーブは、現状では塗り込められているが、古

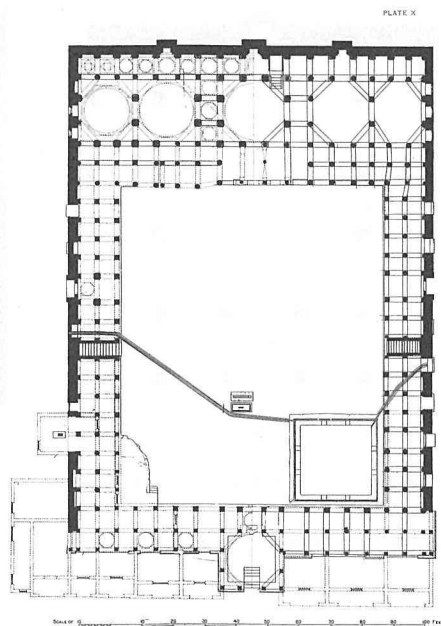


図19 ソムナート・パタンの大モスク平面図 (Cousens 1931: Pl. Xに加筆)

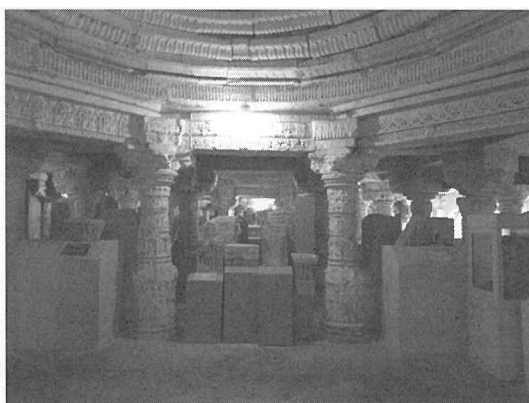


図20 ソムナート・パタンの大モスク、中央ドームを南から撮影

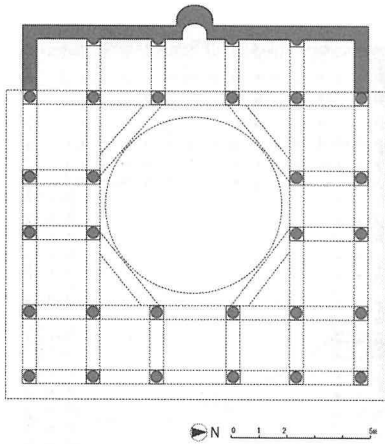


図21 マーイブリ模式復原平面図

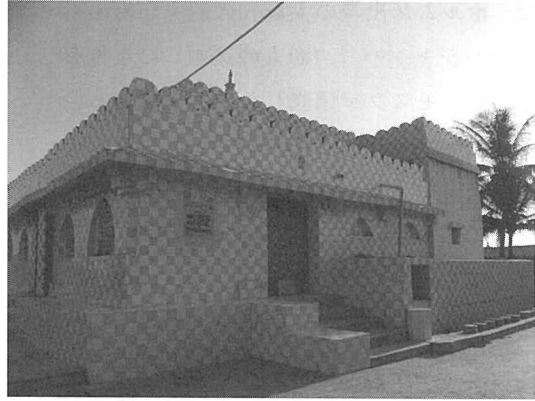


図22 マーイブリ、外観を北東から撮影

い写真には外側に、マンガロールの14世紀後半のモスクと同様の半円形の突起部を見せる。

カズンスは、詳述した2つのムスリムに関する建造物のほかに、町の西郊外、マーイブリに隣接するマンガローリー・シャーの墓にも言及する(図23)³¹⁾。インスクリプションが1299年の建立を伝え、インド考古学局によって指定される。しかし、建造物はマーイブリ同様、厚塗りが施され、様式的判断はできない。平面は間口3間奥行3間で中央に半円形のミフラブの突起がある。ファサードには軒の突出があり、ここだけは古い様式を見せる(図24)。内部にランプ文様を描いた大理石の墓石があり、14世紀から15世紀のキャンベイで制作され、インド洋を運ばれたものと推察される[深見2008b]。

以上、3件は既往研究に言及されている物件であるが、以下に述べる4件は、調査を通して、様式的類似性が確認できたものである。

第1に旧市街内の北東部に位置する連棟のモスクで、現地ではポリヤリ・モスクとドウルダミ・モスク(以下ポリヤリ・モスクと表記)と呼ばれていた(図18)。南棟は、全体では間口3間奥行6間で、奥行2間の開放的なポーチ部分と奥行4間の閉鎖的な奥室部分に分かれる(図25)。北棟は、南棟の北側に接し、キブラ壁を一直線上に並べた位置にある。北棟

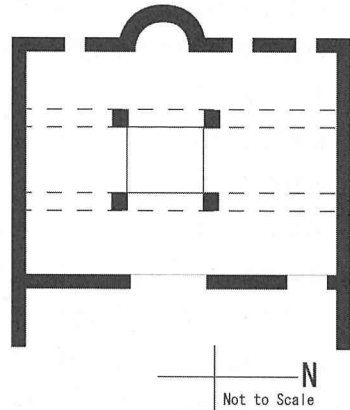


図23 マングローリー・シャーの墓模式平面図

31) カズンスは東門近くのコティ、北門の外側にあるマーイブリ近くの階段井戸、およびジャファルとムザファルの墓の名だけをあげているが、調査ではいずれも確認できなかった。町の西門近くに位置するジャファルとムザファルの墓に関しては1494年モスク建設のインスクリプションが所在する[Desai 1954-5: 1974]ことを記述する。

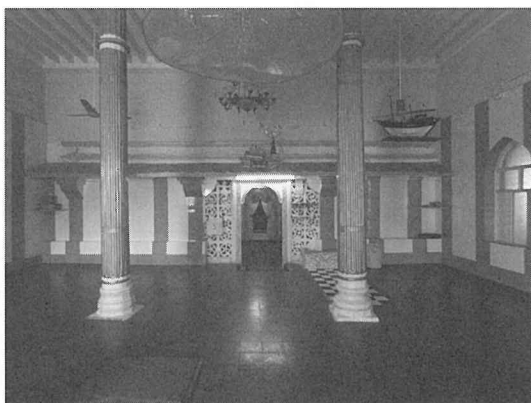


図24 マングローリー・シャーの墓、奥に見えるのが東面のファサード

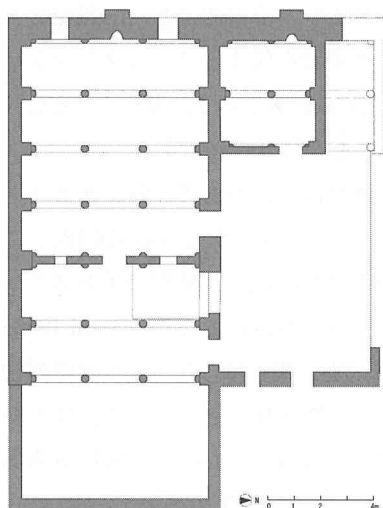


図25 ボリヤリ・モスク平面図

は本来、間口3間奥行2間で、東辺中央間を入口とする閉鎖的なモスクであったようだが、現在では北側の1間分を縮小し、間口2間となる。両棟ともキブラ壁の中央をミフラーブとし、室内には無装飾の半円形の凹部、外壁には角の落ちた矩形断面の突出部を見せ壁面上部まで立ち上げる点は、ソムナート・パタンの大モスクのミフラーブと類似する。礼拝室の東側に列柱ポーチをもつ点、転用材ではなく新材を使う点、梁が間口方向だけに架かり板石の天井板を載せる点、柱や梁に分節はあるが

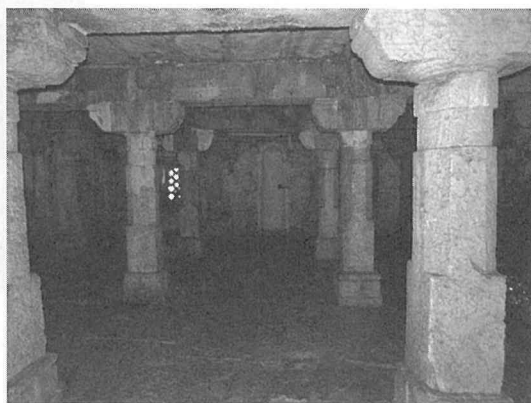


図26 ボリヤリ・モスク、南棟の西奥礼拝室を東から撮影

繁縷な装飾を伴わない点は12世紀後半と位置付けられるバドレシュワルのモスクと類似する(図26)。ただし、バドレシュワルの例と比べると天井高が1メートル余り低く、間口方向両端の柱が袖壁を伴い壁から突出する点は異なる。

これらの諸点から様式的には、ソムナート・パタンの大モスクあるいはさらにさかのぼる様相を表し、バドレシュワルの諸例との類似性から最初に述べた1264年の頃を採用することも可能である。イスラームの支配が確立する以前に、港市の市壁内にムスリムが居住することは、市壁内に位置するバドレシュワルの諸例からも裏付けられる[深見 2006]。ソムナート・パタンにおける14世紀のモスク建設を伝えるインスクリプションについては、1326年[Desai 1955-56: 89-90]と、様式的に類似する例[Desai 1955-56: 90-91]が提示

される³²⁾。その他にも、15世紀のモスク建設を伝えるインスクリプションが10件あるので、少なくともこれらと結び付けられよう。

第2は、町の北門の外にあるミタシャバン・モスクである(図18)。このモスクには、1428年のインスクリプションが報告される[Desai 1955-56: 93]。現在は、ファサードの列柱の間に壁が作られているが、柱や軒の様式は古く、おそらく間口5間奥行2間のモスクである³³⁾(図27)。様式的に、現在ジュナガード博物館に保存されているインスクリプションの語る年代を、建設年代とすることが適当と言えよう。

第3は、まったくの廃墟と化した建造物である(以後「北東の廃墟」と呼ぶ、図28)。ほぼ、町の中心部、東門と大モスクをつなぐ東西道路の北側に位置する(図18)。確認できるのは、西側を奥壁とする間口3間奥行1間の建造物の北側に矩形の部屋が接し、さらに北側に入口の残る建物で、西壁にミフラーブ状の突起は見られない。先のボリヤリ・モスクとよく似た細部を持つので、あるいはムスリムと関連する建造物であったのかもしれない。

第4は、町の西側、おそらくこの辺りに市壁があったと推察される場所に残るモスクである(以下「西のモスク」と呼ぶ、図18)。間口5間奥行2間の平面で、基壇上に載る(図29)。柱はモルタルで厚塗りが施されているが、軒部分およびミフラーブの背面は伝統的な造りである。現在中央奥のベイは墓として囲われて、ミフラーブの内部分節に関しては不明である。おそらく、15世紀から16世紀の建造物であろう。

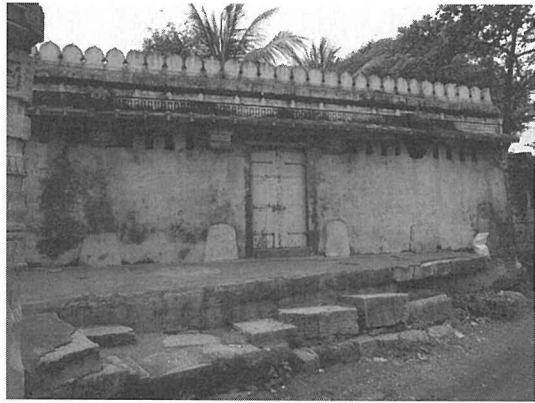


図27 ミタシャバン・モスク、東面のファサード

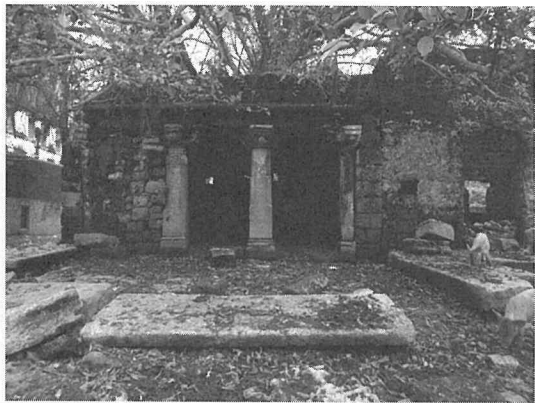


図28 北東の廃墟、東より撮影

32) 様式的に14世紀前半と判断されるインスクリプションに関して、デサイは、その所在地をソムナート・パタンのゴリヨン・キ・マスジドにあるとする。聞き取りにより、ボリヤリと表記したが、ゴリヨンとボリヤリと、もしかしたら同一のモスクの可能性も残されている。

33) 2010年の調査時には、鍵がかかっている、内部は未調査である。

3 ヴェラヴァル

—— 既存報告にある 1 遺構と 新発表の 1 遺構 ——

ヴェラヴァルは、矩形の内郭とそれを不整形に囲む市街からなる（図 30）。3 キロメートル南東に位置するソムナート・パタンは海岸線が直線で良港が得られなかったため、寺院都市の港としても機能した事が推察され、ムガル朝時代、ハッジへの船出の港として、17 世紀にスーラトに



図 29 西のモスク，東より撮影

その座を渡すまで、にぎわっていたという。矩形内郭の南東に税関（マンドヴィ）のある港があり、矩形内郭の北東から 3 筋のバザールが北東、北、北西へと向かう。矩形内郭の南と西は高密度な居住地である。こうした町の組成がどこまで遡れるのかは難しいが、後述する建造物とインスクリプションを照合すると、いくつかの場所がムガル朝以前に遡る。

既往研究に取り上げられた建築は大モスクだけである。1332（732）年のインスクリプション [Husain 1957-58: 38] を持つ大モスクは、矩形内郭の北辺内部に接する（図 30）。カズンスは、ソムナート・パタンの大モスク同様転用材を用いた事が門の部材で明らかだが、



図 30 ヴェラヴァル（Google Earth に加筆，image© 2009 DigitalGlobe）

礼拝室はより小さく特徴的でないと説く [Cousens: 34]。インスクリプションはミフラーブの北隣の壁面に埋め込まれているが、礼拝室は、近年、柱が分厚く塗り込められ、新しいミフラーブが挿入された。平面は単一の12柱式ユニットを中心とし、ファサードの突出部は伴わないが、マングロールのムバラク・モスクとほぼ同様である (図 31)。また、入口のトーラナ・アーチ部分は、おそらく転用材と推察される。

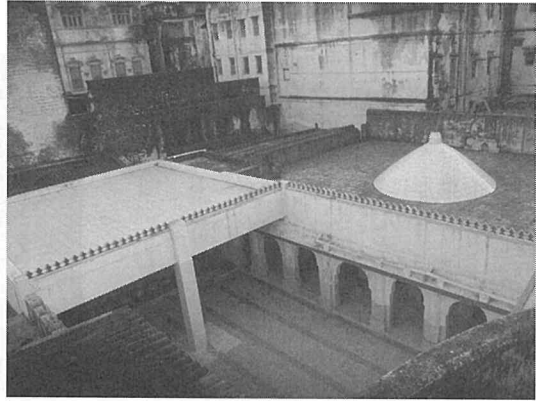


図 31 ヴェラヴァルの大モスク、北東屋上より撮影

既往研究にないモスクとして、町の北東にビビ・キ・モスクを指摘する。間口3間奥行1間の小規模な平面で、西壁中央にミフラーブがあり、床面は現在の道路面より深い (図 32)。分節された柱と柱頭、梁は間口方向のみで厚い板石を天井とする点、ミフラーブ背面の円形断面の突出部、軒飾りと庇などは、14世紀とされる建造物と同様な様式である。ただし、室内から見たミフラーブは単にアーチ型の凹部が刻まれているだけで何の装飾もない (図 33)。

CIBは、フォウズダル邸の近くのモスクに1430/1 (834)年にモスクを建立したという白大理石に刻まれたペルシア語とアラビア語のインスクリプションを紹介する [CIB: 23]。デサイはこのインスクリプションを読み直し、1436 (839)年と訂正し、バザール近くのモスクにあるとする [Desai 1953-54: 55]。フォウズダル邸を町の中心部にあるゴスワミ・ハヴェリとすれば、このモスクの位置とほぼ一致する。また、1488 (893)年のモスク建設のインスクリプションは、矩形の内郭部の南東外側、港の税関近くに位置するナギナ・モスクの建設を語

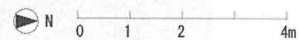
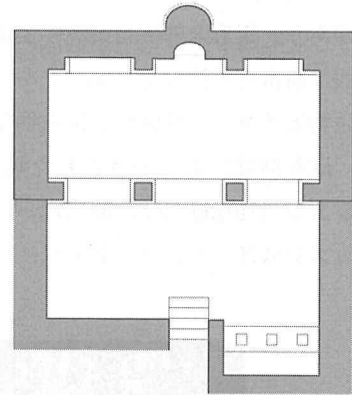


図 32 ビビ・キ・モスクの平面図

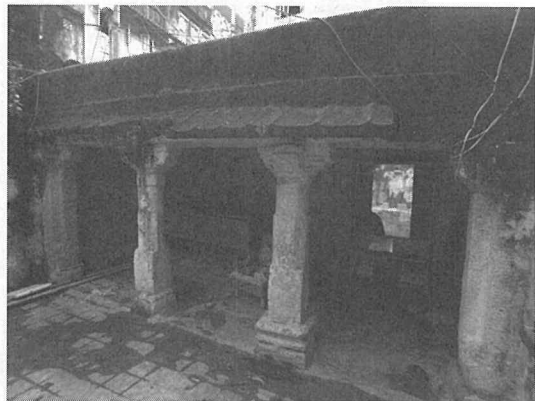


図 33 ビビ・キ・モスク、北東より東ファサードを撮影

るもので [Desai 1953-54: 64], このモスクは改築されている (図 30)。

Ⅲ 調査モスクの位置づけとそれぞれの港市

1 様式史的吟味

本稿で取り上げた諸建造物は、従来語られたムスリム政権最初のデリーのクトゥブ・モスク (1198 年), アジメールの大モスク (1206 年), あるいはデリーのトゥグルク朝の侵攻に伴うバローチの大モスク (1322 年), キャンベイの大モスク (1325 年), ドルカのヒラール・ハーン・ガズビーモスク (1333 年) という系列からずれ, むしろ 12 世紀後半のバドレシュワルやジュナガードのアル・イラージー・モスク (1286 年) と共通する諸点を指摘することができる (表 2)。詳しい比較は別稿で詳細に検討することとし, ここではカティアワール独自の特色を指摘するにとどめたい。

マンガロールの大モスクのファサードのアーチ壁にある 3 つのアーチ, ラヒマット・モスクのファサード両脇のアーチ (図 5), そしてムバラク・モスクの南入口に設けられたアー

表 2 対象遺構の比較 (主体部の構成順に整理)

名称	機能	所在地	建設年代	ファサード	主体部 (礼拝室)	梁 方向	ミフラーブ	門
大モスク	M	Mn.	L. 14c.	アーチ壁	⑫ × 10	両	トーラナ・半円	④ N ④ E
ラヴァリ	M	Mn.	L. 14c.	列柱	⑫ × 3	両	トーラナ・半円	⑫ N
大モスク	M	S. P.	1326?	列柱	⑫ × 5	両	?・矩形	⑫ E
大モスク	M	Ve.	1332	列柱	⑫	両	?	④ N
マーイプリ	T	S. P.	14c.	列柱	⑫	両	?・矩形	—
ムバラク	M	Mn.	1385/6?	列柱	⑫ + ④	両	トーラナ・半円	④ N ④ S
2 ドーム廃墟	T	Mn.	15c.	列柱	⑫ + ⑧	両	枠・矩形	—
カトゥヴィ	T	Mn.	15c.	列柱	⑧	—	—	—
ポリヤリ	M	S. P.	E. 14c.	列柱	3 × 4 + 3 × 2	間口	アーチ・矩形	—
ラヒマット	M	Mn.	1382/3	両端アーチ	5 × 2	間口	In・矩形	④ E
ミタシャバン	M	S. P.	1428	列柱	5 × 2	?	?	—
西のモスク	M	S. P.	15-16c.	列柱	5 × 2	間口	?・半円	—
ブドゥルディン・シャー	M	Mn.	15c.	列柱	3 × 3	両	トーラナ・矩形	—
マンガローリー・シャー	T	S. P.	1299	列柱	3 × 3	間口	?・半円	—
カトゥヴィ	O	Mn.	15c.	列柱 + 窓	3 × 2	間口	—	—
ドゥルダミ	M	S. P.	E. 14c.	列柱 + 壁	3 × 2	間口	アーチ・矩形	—
北東の廃墟	O	S. P.	15c.	列柱	3 × 1	間口	—	—
ビビ・キ	M	Ve.	15c.	列柱	3 × 1	間口	アーチ・半円	—

機能: M=モスク, T=墓, O=その他の建築

所在地: Mn.=マンガロール, S. P.=ソムナート・パタン, Ve.=ヴェラヴァル

建設年代: E=Early, L=Late

平面: ⑫=12柱式, ⑧=8柱式, ⑫×α=12柱式の並列数, β×γ=グリッド式の間口×奥行

ミフラーブ: 内部分節・断面形状, In=インスクリプション

門: 門の平面と位置, ④=4柱式, ⑫=12柱式, N=North, S=South, E=East

チ(図34)は、共通した形状を呈する。スプリング・ポイントを内側に持ち送りながら、ファサードを帯状の装飾帯で分節するために、アーチのライズが低い特徴的な形で、この表現はほかの地域では見られない。しかも、これらのアーチは持ち送り構法をとり、いまだにアーチ構法を理解していない³⁴⁾。クトゥブ・モスクやアジメールの大モスクのような転用材モスク、あるいは、トゥグルク政権の侵攻に伴うキャンベイをはじめとするグジャラートの大モスクとは、アーチの形、アーチ壁の構成が異なる。

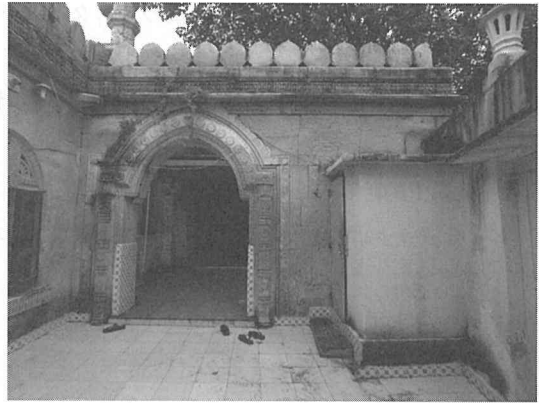


図34 ムバラク・モスク南門の西面に位置するアーチ

1159年のイブラヒム祠堂以来、カッチ地方およびカティアワール地方では、礼拝室のファサードに柱を並べ列柱とする様式が好まれる〔深見2008a:40-42〕。14世紀になってもアーチ壁については、わずかマンガロールに2例と好んでつかわれた様子がなく、しかもラヒマット・モスクではその形態が特殊である。とはいえ、バドレシュワルやジュナガードに見られる13世紀までの奥室と列柱ポーチという2室構成から、一室だけの開放的な礼拝室が多くなる。その前面に回廊や壁で庭が囲まれ、突出する形のドームを冠した門が設けられた。ここから、ムバラク・モスクに見るような列柱のファサードから突出するユニットという特殊な形態が生まれたと解釈できよう。

梁柱構法で広い礼拝室を作る場合、柱を基盤の目状に配するタイプ(グリッド式)と、12本の柱の上にドームを載せた区画を並べるタイプ(12柱式)に分けられる〔石井ほか:1984〕³⁵⁾。カティアワール地方の事例では、グリッド式が好まれるが、その他のグジャラート地方ではグリッド式は少数で、しかも15世紀後半以後に多い。また、グリッド式の場合、間口方向にだけ梁を架け、厚い切り石の天井とすることが、バドレシュワルから継続して好まれ、この点も半島部以外のグジャラートと異なり³⁶⁾、グリッド式で間口方向にだけ梁を

34) デリーでのアーチの迫持ち構法技術の習得について、荒松雄は、1250年頃のバルバンの墓を指摘する。グジャラート地方においては、1325年のキャンベイの大モスクでは、既にアーチの迫持ち構法が確立している。

35) 12柱式の最も古い事例は、バドレシュワルのイブラヒム祠堂のドームであるが、12柱の周囲を、壁で覆っている。次に位置するのがデリーやアジメールのモスクで、12柱のユニットを並べて礼拝室に用いるようになる。

36) カティアワール地方でグリッド式を採用する例では、間口方向だけに梁を架けたものが8例と多い。一方、グリッド式で間口奥行両方向に梁を架け渡すのは、マンガロールのブドゥルッディン・シャー・モスクだけである。

架ける構法は、カッチからカティアワール地方の特殊性といえよう。なお、12柱式ユニットを接合する場合には、周囲にグリッド式を併用する形になる。この場合には必ず、梁方向が両方向となる。それゆえ、間口方向にのみ梁を架ける構法は、よりプリミティブな形式といえる。また、12柱式をとる場合、いくつかを並列するのではなく、単一の12柱式を中心とする点もカティアワール地方の特徴の一つである³⁷⁾。

ミフラーブの形では、内側には円形凹みにトーラナ型を分節し、外側に水平帯を刻む半円塔をつける形が、マンガロールの大モスク、ラヴァリ・モスク、ムバラク・モスクに共通する(図35)。ラヒマット・モスクでは内側上部にインスクリプションがはめ込まれているためトーラナ型を持たないが、同じ様式と捉えられる。14世紀後半には、この形式が主流であったといえる。特徴的なトーラナ型はソムナート・パタンの北門にも同様な形が刻まれる(図36)。

このように、カティアワール地方の港市の14世紀から15世紀のイスラーム関連の建造物は、12世紀最末期から13世紀初頭のデリー周辺の転用材モスクと異なるだけでなく、14世紀初頭からのトゥグルク朝の進出によりグジャラート地方に作られたモスクとも異なる様相をもつ。しかも14世紀の後半から、新材で構築されたモスクも同様な傾向をもつ。カッチ地方に12世紀半ばからからモニュメントを築いたようなイスラーム教徒のコミュニティの中に根付いたモスクや墓の建築様式が、デリーからの支配者が到来し、アーチ壁のような新たな形態が伝播したのちにも強く残っていったことが指摘できる。



図35 ムバラク・モスクの中央ミフラーブ

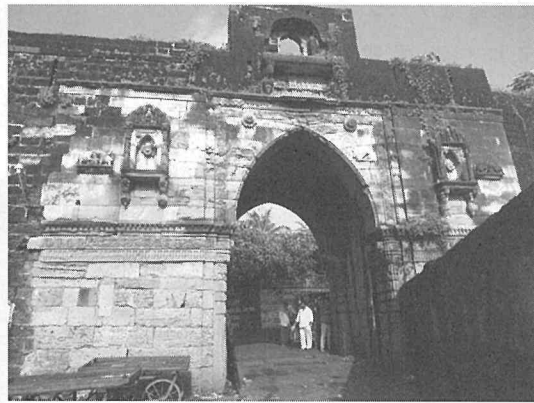


図36 ソムナート・パタンの北門、西より撮影、建立を11世紀にさかのぼる

37) ソムナート・パタンの大モスク、ラヴァリ・モスク、マンガロールの大モスクが複数の12柱ユニットを並列する。ヴェラヴァルの大モスク、マンガロールのムバラク・モスク、パタンのマールイブリは単一の12柱式を採用する。

2 矩形都市から港方向への発展 —— マングロール ——

これら、当時の遺構と推察できる建造物、およびインスクリプションの所在地を総合して、マングロールの15世紀までの都市史を考えてみたい(図37)。

東西南北に門をもつ矩形の都市形態は、インドの土着的傾向を見せる。アンヒルワダ・パタンを拠点としたゴヒルによる1146年のインスクリプションがマングロールの最初の統治を語るという[GB: 543]。内周市壁の南門は現在閉ざされ寺院となるが、様式的に古く、市壁建設は、14世紀末のムスリム支配以前にさかのぼる(図38)。

ムスリムがこの港市にいつ頃から住み着くようになったのかは不明ながら、14世紀初頭のハルジー朝の遠征の時に、その支配下に置かれた。ただし、1319年のソダリ・ワーウのインスクリプションによれば、支配者はラージプートのラヴァル・マヒパルデオに戻ったという[Commissariat: 71]。トゥグルク朝



図38 マングロールの南門、現状はヒन्दウー祠堂、北東より撮影



図37 マングロール周辺 (Google Earth に加筆, image© 2010 DigitalGlobe)

のムハンマド・ビン・トゥグルクは、カティアワールの沿岸部の諸都市の再征服を進める。おそらく、1368年 [GB: 545] あるいは1375年 [Commissariat: 72] ころに、デリーからの遠征に同行したイズ・ウッディンと、同じくこの時にマングロールを訪れ港近くのダルガーを建設したサイド・シカンダルがマングロールの統治官となる [GB: 545]。

14世紀後半にはいくつかのモスク建設が行われた。パテルは、14世紀のマングロールに関して、数多くのモスクとインスクリプションは、この町に大きなムスリムのコミュニティが存在し、彼らの建造物寄進はその裕福さを表し、ムスリムの活躍する港町として繁栄していたと記す [Patel: 68]。

1382/3年のブハーリー教団と関係するラヒマット・モスクは郊外に位置し、1383/4年、1385/6年、フィールーズ・シャー・トゥグルク (1378~1386年) 治下の3つのモスク建設のインスクリプションは、デリー政権の地方統治官がモスクを建設したことを語る³⁸⁾ (表1)。

これら3つのインスクリプションを保存位置と現存遺構から吟味し、当時の都市の様相と結びつけたい。1383/4年のインスクリプションは19世紀には町の西北のボーラ・モスクに保存されていたが、先述したように大モスク建設と位置づけられ、現在は大モスクにある [Desai 1962: 24-6]。今までこの地方に例をみないデリー風のアーチ壁を備えた巨大な大モスクが、内周市壁の外側、港への方向に建設された。内周市壁の北西部、リングロードの内側のラルプーラが1624年に開発されたインスクリプション [Desai 1999: 154] から、内周市壁の北外側はムガル朝期の拡張と判断できるので、14世紀後半には、大モスクの建設を契機に、内周市壁の西門から大モスク、そしてバンダル門に続く一体が外側の市街地として機能し、内周市壁から港へと通じる街区として繁栄するようになった事が推察される。

2番目の1385/6年のインスクリプションは [Desai 1962: 27-30]、19世紀には町の東門の内側に位置するジュニ・ジャリ・キ・マスジドに保存されていたが、現在はムバラク・モスクに取り付けられている。インスクリプション移動の経緯は不明ながら、内周市壁の内側にムバラク・モスクが建設されたのもこの頃であろう。ラヒマット・モスク、大モスク、ムバラク・モスクに共通するマングロール特有のアーチの細部は、在地の技法や構法を継承する中から、土地固有の細部様式が確立したことを物語る。

第3は、町の中心部のラヴァリ・モスク近くのダルガーに保存されていたと伝わるマフドゥムザーデ・マリク・アブドゥル・マリク・ブン・フセインによるモスク建設のインスクリプションである [Desai 1962: 30-2]。さらに、1389年3月24日には、スフラワルディの弟子で90歳で亡くなったアフマド・トゥルク・ガーズイの墓建設のインスクリプションが残る [Desai 1999: 152]。

1395年の内周市壁中央北部に位置する城塞 (ダルバルガド) 建設のインスクリプション

38) インスクリプションにデリーのトゥグルク朝のスルタン名を刻む。

から [Desai 1962: 34-7], マングロールのムスリム支配者が, 都市整備に乗り出していたことがわかる。マリク・シェイフ・ブン・タージが 803 (1400) 年に市壁を建設したことをインスクリプションは伝えるが [Desai 1962: 38-9], これに関しては内側市壁の改修, あるいは大モスク西側の外側市壁の建設をさすと推察される³⁹⁾。先述したように大モスクの建設によって, 矩形内郭部の南西外側が都市として発達し, 市壁建設の必要性を生じたのではないだろうか。内周市壁のほぼ中央, 城塞の南にある, 小規模ながら整ったラヴァリ・モスクの建設も, この時代のことで, 都市整備の一環として位置づけられる。

バンドル門を有する外側市壁が示すように, 町は港の方向に向かって拡張していった。また, おそらくこのころには, 港へと続く途上に, いくつかのムスリムの宗教建築も建設された。とりわけ, 港への道には, 聖者廟と関わりのあるカトゥヴィ・ダルガーのような複合建築が建設され, カズンスが報告する港への途上のモスク (2 ドーム廃墟) もミフラブ壁を付設した墓建築として 15 世紀に建設された可能性が高く, 様式的にも合致する。15 世紀の建設のインスクリプションとしては, ダルバルガドに保存されたインスクリプションが 1424 年のモスクとジャマアット・ハーナ建設を語る [Desai 1953-54: 54]。

1402/3 年のヒンドゥー教徒の結婚税 [Desai 1968: 22], 1441 年の動物移動税 [Desai 1953-54: 57-8], 1444/5 年の不法な徴税の禁止 [Desai 1953-54: 59] に関するインスクリプションは, ムスリム支配下の港市が, ヒンドゥー教徒たちと共存しながら, 繁栄していた様相を伝える。町の東西の目抜き通りに面したブドウルッディン・シャーのダルガーにある小規模モスクも, この頃の建設と推察される。

3 寺院都市でのモスク建設 —— ソムナート・パタン ——

ソムナート・パタンでは, まず, 市域の広がりを検討してみたい (図 18)。モタ・ダルワザとも呼ばれる北門は 11 世紀にさかのぼる壮麗な町の表門で (図 36), ここから南北の主要通りが伸び, 約 600 メートルでソムナート寺院につきあたる。町の中央の交差点に, 大モスクの北東角が位置する。この交差点から北門までの距離は, 約 350 メートルである。東側に位置するトリヴェニ河に因んでトリヴェニ・ダルワザと呼ばれる東門の位置は, 現在の市域の広がりから考えると町の中心の交差点から約 320 メートルの位置と推定される。西門に関しては不明ながら, 1452 年のインスクリプションが残るチャンダニ・モスク, および西側の墓地⁴⁰⁾から推察すると, この交差点から 250 メートルあまりの位置と推定される。南

39) CIB で A. H. 700 年 (1301 年) と読み下されたインスクリプションは, デサイによって, A. H. 803 年 (1400 年) と改められている [Desai 1962: 39]。城塞建設のインスクリプション 797 年ラジャブ月 14 日 (1395 年 5 月 5 日) [Desai 1962: 35-6] とも妥当である。

40) CIB には, インスクリプション所在地として西門外のムジャッファル・マスジドと記載する [CIB: 32]。同インスクリプションに関してデサイは 1494 年と再読を行い, 所在地としてのジャッファル・ムザッファル・ダルガーの西壁と記す [Desai 1985: 204]。ただし, この建造物については, 現地調査の聞き取りから見つけることができなかった。



図 39 ソムナート・パタンおよびヴェラヴァール周辺 (Google Earth に加筆, image© 2009 DigitalGlobe)

門に関する言及はないが、ソムナート寺院の位置から、南への広がりには町の交差点から約 250 メートルの位置にあったと思われる (図 18)。このように東西南北に門をもつ矩形の都市形態は、マングロールと同様でインド古来の伝統を踏襲する。市域の広がりもマングロールの内周市壁と比べると、2 倍弱と広く、ソムナート寺院を中心としたヒन्दゥー教の寺院都市としてにぎわっていたことが推察される。ただし、海岸線は平坦で、港の跡を見いだすことは難しく、古くは東に位置するトリヴェニ河の河港が、後には北西のヴェラヴァールが港湾機能を支えていたのであろう (図 39)。

マングロール同様、ムスリムがこの港市にいつ頃から住み着くようになったのかは不明ながら、デリーのトゥグルク朝がグジャラートに進出する以前、1264 年にさかのぼるモスク建設を語るインスクリプションがある。ホルムズ出身の船主の大商人フィールズによって 1264 年のモスクは町の外に建設されたと語られ、1299 年のマングローリー・シャーの墓建築やマインブリがヴェラヴァールへの途上に位置することからも、町の北、外側にムスリムが拠点を作っていたのだろう。このころには、ヴェラヴァールが港として重要な役割をもつようになっていたと思われる。

1326 年のモスク建設のインスクリプションには、この地域のトゥグルク朝統治官の支配がうたわれ、統治官の息子かもしれない人物が建立したので⁴¹⁾、町の中心に位置する大モスクと位置付けることもできよう。兄弟都市ともとらえられるヴェラヴァールの大モスクが

1332年に建立されていることから、その可能性は大きい。町の中心にモスクを建設するという意味でも、ヴェラヴァルの大モスクの場合と一致し、マンガロールのラヴァリ・モスクの位置も同様である。ただし、19世紀末にはこのインスクリプションはソムナート寺院の近くパナワディ・モスクに保存され [CIB: 4-5]、ソムナート・パタンの大モスク建設とは結びつけられていない。また、このインスクリプションとほぼ同時代と推定される建物建立のインスクリプションは、ゴリヨン・キ・マスジドに所在したと報告されている [Desai 1985: 31-2]。様式的には町の北東部に位置するボリヤリ・モスクがこの時代の建造物と推定される。このように、市壁内に複数のモスクが建立されていく様子が読み取れる。

また、東門近くの小さなモスクにあったとされるフィールーズ・シャーの時代といわれるインスクリプションは、マンガロールのラヒマット・モスクのインスクリプションとよく似ており、14世紀後半には、マンガロールとソムナート・パタンがインスクリプションの特徴的な様式を共有するようになったことがわかる [Desai 1963: 25]。

1408年以後、アーマド・シャー朝治下には9つものモスク建設のインスクリプションが残るので、かなりの数のイスラーム教徒がソムナート・パタンに居住し、モスク建設活動が盛況を呈していたことがわかる。インスクリプションの保存位置を検討してみると (図18)、1420年のジャマダール・モスクは北門の内側に [Desai 1955-56: 92]、1423年のマンガローリー・シャー・ダルガーは町の北西郊外に [Desai 1999: 203]、1428年のミタシャバン・モスクは北門外に [Desai 1955-56: 93]、1456年のチャンダニ・モスクは町の北西内部に [Desai 1953-54: 61]、1472年のパンチ・ピビ・モスクは町の西内部に [Desai 1963: 30-2]、1494年のモスクは西門外に [Desai 1999: 204]、1539年のカーディー・モスクは町の北東内部に [CIB: 36-7]、アフマド・シャー3世 (1554~1561年) 治下のモスクは町のバザール沿いに [Desai 1953-54: 75-6] 位置する。インスクリプションの移動がないと仮定すれば、当時、このように町のあちこちにモスクが建設されたことを伝える。なお現存遺構に関しては様式的観点からは、チャンダニ・モスク、北東の廃墟、西のモスクが該当する。

ソムナート・パタンは、著名なヒンドゥー寺院都市であるにも関わらず、14世紀から15世紀になぜこれほど多くのモスクが建設されたのだろうか。タバルは、15世紀になると戦死者記念碑としてのサンスクリット語の短いインスクリプションが増加すると述べ、1406年のサンスクリット語のインスクリプションが、ビスミラで始まることに加え、マフムードの息子ヴァフラ (ボーラ)・ファリドがトルコ族に襲撃され、地方統治官ブラフマデヴァのために戦い、殺されたことを紹介する [Thapar: 99-100]。この時代の地方統治官はヒンドゥー教徒で、ファリドは、イブン・バットゥータも記述したブフラ (ボーラ) [家島訳注: 101, 151-2] の語るヒンドゥー教徒の改宗ムスリムであろう。おそらくアフマド・

41) アヤーズの息子、マリク・タージ・ウッディン・ドゥワル・アフマド治下、アフマドの息子ハミドによるモスク建立を伝える。このアフマドが同じ人物かどうかは不明である。

シャー朝の支配下にはいっても、寺院都市としての性格は維持しつつ、従来から暮らしていたイスラーム教徒も寺院都市の一員として共存し、交易や商業に参加して富を得、自分たちの信仰を守る場としてのモスクを建設していったと解釈することができよう。

4 寺院都市の港湾機能 —— ヴェラヴァル ——

ヴェラヴァルでは5つのインスクリプションが報告されているのみであるが、これらを総合してみよう。都市の矩形の内郭部は、ソムナート・パタンやマンガロールと同様にインド土着の形状で、その中心にはジャイナ教寺院が位置している（図30）。内郭部がマンガロールに比しても東西約150メートル、南北約100メートルと小規模なので、寺院都市ソムナート・パタンの港湾機能を担う都市であったと思われる。

前述2都市同様、ムスリムがこの港市にいつ頃から住み着くようになったのかは不明ながら、大モスクの建設が1332年であることから、この時代にはイスラーム教徒が町の支配権を握り、内郭部に大モスクを建設したことがわかる。ソムナート・パタンからヴェラヴァルへの経路上に、14世紀初頭にイスラーム聖者関係の建造物が建立されていることから、西アジア出自のムスリム商人を中心に、ヴェラヴァルとソムナート・パタンはさらに強固な関係を持つようになる。

1408年の市壁建設のインスクリプション [Desai 1953-54: 51] は、マンガロールの市壁建設と照合すると、外周市壁の建設であった可能性も高い。外周市壁は、現状の旧市街の広がりから、矩形内郭部を取り囲む様な形で、東西約500メートル、南北約400メートルの大きさであったことが推察される。アフマド・シャー朝治下に2件のモスク建設のインスクリプションがある [Desai 1953-54: 55, 64]。内郭の外、北の外壁へと続くバザール近くにモスクが、1436年に建設されたことを語る。港近くの1488年の例は、イランのギーラン出身の支配者が建設したことをうたう。アフマド・シャー朝から派遣されたムスリム支配者のもとでソムナート・パタンの外港としてヴェラヴァルが栄えている様相が伺える。

おわりに

本稿では、グジャラート地方の西部、カティアワール地方に残るムスリムに関連する遺構について、既往研究に説かれた遺構に、いくつかの現地調査によって確認した新たな遺構を付け加え、13世紀後半から16世紀前半までと位置づけた。そして、これらの遺構は、14世紀に確立したデリーからのイスラーム支配によって確立した様式ではなく、少なくとも12世紀後半以後、ジャイナ教徒やヒन्दゥー教徒の支配下において港市に居住するムスリム達が確立した、地方独自の様式と技法と連続性をもつ特徴的な様式をもつことを明らかにした。この点は、従来デリーからのムスリム支配を通して語られてきたグジャラートのイスラーム建築史について、今後再考する必要があること示唆する。

さらに、これらの建造物情報と都市調査に、既往のインスクリプション研究において従来注目されなかった位置情報を加えることによって、対象とした3つの港市について、今まで説かれることのなかった都市における地理的な歴史情報がある程度明らかした。これを通して、いままでインスクリプションから文字情報、特にその年代と建立者だけが取り上げられ、その所在地や建築物を都市史に利用するという観点が抜けていた点、それらを総合すると都市研究に応用できることを提起した。

最後に、今回取り上げた3つの港市について、なぜこれほど多くの中世のムスリムに関連するインスクリプションが残っているのか、そしてなぜこれほど歴史的に重要な遺構が港市に建設されたのか、そしてその事実から何を汲み取らねばならないのかという点に関して、現段階における試論を述べてみたい。

グジャラート地方の13世紀から15世紀の建築史は、デリーのイスラーム王朝の進出と、在地ヒンドゥー勢力の抗争、その後アフマド・シャー朝の成立という観点で語られ、そこに残された遺構は、支配の歴史を語るモノとして記述されてきた。また、ほぼ同時代のギルナールやシャトルンジャヤ、あるいはアブーに残るジャイナ教寺院建築は、ムスリムの建築史とは全く別な視点で描かれる。建築史研究においては宗教による建築史の区分がある上、イスラーム建築史においては支配者が誰であるかということが中心で、そこに居住し、建設活動を行ってきたイスラーム教徒、そしておそらくそこに技術を提供した在地の人びとのことに言及したものはない。支配と建築、そして宗教という文脈は、たしかにモニュメンタルな建造物という意味で重要である。しかしながら、特に港市のような、さまざまな人々が入りし、商人が交易によってかなりの経済力を有する町に関しては、異なる観点から考えることの必要性が提起される。

本稿で述べたように、カティアワール地方の3つの港市では、13世紀後半から16世紀前半にかけて、ムスリムの関連する遺構そしてアラビア語やペルシアのインスクリプションが、ムスリム政権が本拠地とした14世紀のアンヒルワダ・パタンあるいは15世紀のアフマダーバードにも匹敵するような活発なムスリムの建設活動を語る。イブン・バットウータが壮麗な港町キャンベイの様相を述べる。「この町は、建物の美しさとモスクの造りにおいて、数ある町のなかでも一番に優雅である。その理由は、その住民の多くが外国の商人たちであり、彼らは常に雅びな邸宅や壮麗なモスクを町に建て、そうすること（立派なものを建てること）を互いに競いあっているためである」〔家島訳注：96〕。このような様相が本稿で対象とした3つの港町でも展開していたこのであろう。

建設活動には、支配者としての都市政策や大モスク建設もあるが、小規模なモスクや墓も数多く、3つの港市に居住するムスリムが、インド洋を通じた交易を通して富を蓄積していた様相が読み解ける。しかも、その建造物の様式は、たとえ支配者の建設した大モスクにおいても、デリー、グジャラート内陸部とは異なる傾向を見せる。今まで歴史に表出していなかったような、在地の伝統や、培われた技法からの影響力が、新たに到来したムスリムの支

配者の様式よりも強かったことを表わす。なお、本稿においては、当時の港市を考えていく上で重要なヒन्दゥー教徒の建設活動について言及することができなかつたので、今後の課題としたい。

参考文献

- CIB : Antiquarian Department, Bhavnagar State (1889) *Corpus Inscriptionum Bhavnagari*, Education Society's Steam Press.
- GB : Watson, John W. (1884) *Gazetteer of the Bombay Presidency Vol. 8 Kathiawar*, Government Central Press.
- Asher, B. Katherine (2006) *India before Europe*, Cambridge University Press.
- Brown, Percy (1942) *Indian Architecture (The Islamic Period)*, Taraporevala's Treasure House of Books.
- Burgess, James (1876, reprint 1998) *The Report on the Antiquities of Kathiawad and Kachh*, Archaeological Survey of India.
- Burgess, James (1885) *Lists of the Antiquarian Remains in the Bombay Presidency*, Archaeological Survey of Western India.
- Commissariat, M. S. (1938) *A History of Gujarat- Including A Survey of its Chief Architectural Monuments and Inscriptions Vol. 1 From A. D. 1297-8 to A. D. 1573*, Longmans, Green & Co. Ltd.
- Cousens, Henry (1931) *Somnath and Other Medieval Temples of Kathiawad*, Archaeological Survey of India.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1953-54) Inscriptions of the Sultans of Gujarat from Saurashtra, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 69-74.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1955-56) Inscriptions From the Museum of Antiquities, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 89-102.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1961) Arabic Inscriptions of the Rajput Period from Gujarat, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 1-24.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1962) Khalji and Tughluq Inscriptions from Gujarat, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 1-40.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1963) Inscriptions of Gujarat Sultans, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 5-50.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1965) Kufi Epitaphs from Bhadreswar in Gujarat, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 1-8.
- Desai, Ziyaud-Din A. (1968) An Early Fifteenth Century Inscription from Gujarat, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 21-24.

- Desai, Ziyauddin A. (1985) *Corpus of Persian and Arabic Inscriptions in the Museums of Gujarat*.
- Desai, Ziyauddin A. (1999) *Arabic, Persian and Urdu Inscriptions of West India-A Topographical List*, Sundeep Prakashan.
- Husain, Mahdi (1957-58) Six Inscriptions of Sultan Muhammad bin Tughluq Shah, *Epigraphia Indica Arabic and Persian Supplements*, pp. 29-42.
- Merklinger, Elizabeth Schotten (2005) *Sultanate Architecture of Pre-Mughal India*, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd.
- Patel, Alka (2004) *Building Communities in Gujarat-Architecture an Society during the Twelfth through Fourteenth Century*, Brill.
- Shokoohy, Mehrdad (1988) *Bhadresvar-The Oldest Islamic Monuments in India*, Brill
- Thapar, Romila (2005) *Somanatha-The Many Voices of a History*, Verso.
- 石井昭ほか (1984a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 1 礼拝室の平面について、『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 2853-4.
- 石井昭ほか (1984b) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 2 礼拝室中央部の 2 層・3 層構成について『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 2855-6.
- 石井昭ほか (1985a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 3 12 柱式架構を用いないモスクについて『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 891-2.
- 石井昭ほか (1985b) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 4 礼拝室ファサードの諸形式について『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 889-890.
- 石井昭ほか (1986) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 5 礼拝室の柱について『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 967-8.
- 石井昭ほか (1987a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 6 平面と構法からみた墓廟の諸形式『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 1051-2.
- 石井昭ほか (1987b) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 7 墓廟の立面意匠について『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 1053-4.
- 石井昭ほか (1988a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 8 礼拝室ファサードにおけるミナレットの諸形式『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 853-4.
- 石井昭ほか (1988b) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 9 中央部一対型ミナレットについて『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 855-6.
- 石井昭ほか (1988c) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 10 両端部一対型ミナレットについて『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 857-8.
- 石井昭ほか (1989a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 11 軸線共有型のモスク墓廟複合体『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 939-940.
- 石井昭ほか (1989b) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 12 軸線非共有型のモスク墓廟複合体『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 941-2.
- 石井昭ほか (1990a) グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 13 固有形式の形成過程『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 1117-8.

- 石井昭ほか（1990b）グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 14 アーチ構法の発展、『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 1119-1120.
- 石井昭ほか（1990c）グジャラート系イスラーム建築の様式と技法に関する研究 15 時代区分『日本建築学会大会学術超講演梗概集』 pp. 1121-2.
- 深見奈緒子（2001a）インドのモスクに見る彫刻天井『第8回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会』 pp. 77-85.
- 深見奈緒子（2001b）グジャラート地方におけるインド・イスラーム建築『日本建築学会大会学術講演梗概集』 pp. 129-130.
- 深見奈緒子（2002）グジャラートのイスラーム建築『インド考古学研究 23』 pp. 109-116
- 深見奈緒子（2003）カッチ地方の文化遺産『第10回ヘレニズム～イスラーム研究会』 pp. 55-60.
- 深見奈緒子（2006）バドレシュワルの市壁 —— 中世インド洋港湾都市の一事例 —— 『日本建築学会 関東支部発表論文集』 pp. 501-4.
- 深見奈緒子（2008a）グジャラート地方沿岸部にみるイスラーム教徒のモスクと墓建築『インド洋海域世界における港市の研究 —— インド・カッチ地方を中心として ——』シルクロード学研究 Vol. 30, pp. 27-61.
- 深見奈緒子（2008b）ラールのミフラーブ『第15回ヘレニズム～イスラーム研究会』 pp. 64-71.
- 家島彦一訳注（2001）イブン・バットゥータ、イブン・ジュザイイ編、『大旅行記 6』平凡社.

（早稲田大学イスラーム地域研究機構）